

近松秋江『黒髪』連作の空間構成

——「路地」と「別天地」の間で——

中 島 国 彦

1 祇園裏という「神話空間」

京都の祇園の奥、四条通りから花見小路を南に下り、建仁寺の角を曲がって少し行ったところに、安井金比羅宮がある。この近辺はわたくしにとってこれまでどういう訳か死角になっており、この神社を訪れたのは最近になってからである。夕方近くだが、境内に若い人が多く、行列を作っている。見ると、境内中央に「縁切り縁結び碑」があり、大きな石の穴を順番に潜っている。潜る方向を間違えると、縁結びが逆に縁切りになるので、気を付けなければ、などと話している。すぐ近くの有名な絵馬館には、江戸時代からの多くの絵馬が飾られ、人間の情念のすさまじさがじつとかがえるような場所である。神社の人に聞いてみると、若い人に人気のこの石の碑は、戦後になってからのものという。

花見小路から南へ歩きながら、突き当たりを曲がった安井北門通の名から、記憶がよみがえって来た。「京都市安井北門通東山線西入」、時には更に詳しく「東山線西入南側奥村露地内」など

と手紙に記されているのは、一九一八年四月から翌翌年五月にかけて約二年間、京都の北門通近辺に断続的に住んでいた、近松秋江の住所だからである。その数年の秋江の足取りを、整理しておく。

一九一五年（大正四） 三月末、長田幹彦と京都に滞在、祇園の遊女金山太夫こと前田志う（秋江より一六歳年下）を知る。その後、金品を送り続けたり、短期間会いに出かけたりする。

一九一八年（大正七） 四月末、京都に出かけ、五月からひと月ほど北門通の奥村ヤエ宅の二階にいた前田志うの所に住む。

その後吉野・奈良・高野山に滞在、秋に京都に戻ると、女は姿をくらましていた。京都の宿を転々とする。

一九一九年（大正八） 京都・大阪・比叡山などに滞在、九月に奥村ヤエの隣の家を借り、自炊する。

一九二〇年（大正九） 五月、京都滞在を切り上げ、二年ぶり得上京。

言うまでもなく、後に単行本『黒髪』（一九二四・七・一五、新潮

社)としてまとめられる連作の背景になった体験である。現在残されている書簡は、女が姿を隠してから帰京までの時期では十四通で、関西の旅先か、京都の馴染みの宿に滞在していた時、その後の祇園裏滞在時などがあり、「小生奥村即ち四条大橋袂の菊水洋食店の隠居さんの隣りの持ち家を一軒借りて自炊してゐる」と報じた長田幹彦宛葉書(一九一九・一一・二四付)に記された住所が、「東山線西入南側奥村露地内」なのである。秋江は、一時この奥村の二階に、母と一緒に間借りしていた前田志うの所に、正に転がり込むような形で同居していたわけだ。

そうした一九一八、一九一九年の体験こそ、『黒髪』連作に描かれた物語の中軸であり、女の失踪とそれに対する主人公「私」の煩悶と行動が辿られているのである。連作が一気に書かれたのは、事件より四年後であり、次のように発表された。

『黒髪』 一九三二(大正二一)・一一・一「改造」

『狂乱』 同四・一「改造」(*文末に「二月号『黒髪』後篇」とある)

『霜凍る宵』 同五・一、七・一「新小説」(*七月号は「霜凍る宵統篇」の表題)

東京に帰った時点から、四年ほど前の京都での女との体験を書いて行く——過去を造形するという、そうした行爲が、どういう創作のメカニズムと関連するかは、興味深い点であろう。もう何年も姿を見ることの無い祇園の女は、すでに性愛の対象ではなく、秋江の情念の向かう対象に、質的に変容しているはずだ。

一読して、時間の処理が複雑で、読者は読みながら迷路に迷い

込む感じがするが、更に興味深いのは、京都の祇園裏の場所を背景にした、地理的な空間処理である。確かに地名は、はつきりと書かれている。が、よく読むと、固有名詞の先に実体のない不思議な空間が広がるように思えるのである。だから、固有名詞の場所についての土地勘が必ずしも無くても、充分情景に酔えてしまふ。かえって、具体的な場所を知らずにいた方が、いいのかも知れない。

今、祇園裏を歩くと、細い路地が入り組んでおり、道が行き止まりになったり、道幅が急に変わったりする(写真参照)。昔もこれと同じであり、正に路地の奥が不思議な空間なのである。『黒髪』の主要部分は、一九一八年五月の前田志うとその母との同棲体験をベースにする。読者は、「四」になってやっと物語の現在に戻され、一年半ぶりに女に会う「私」の心情に寄り添うのである。茶屋で短時間女に会い、その後女の言う通り下河原の「祇園社の入口に接近してゐる」旅館で「不安な悩ましい思



ひ」を持って待っていて、女はやって来て、「これから二時間ほどしてから俵屋をお願いします。ほんなら待つとくれやす」と言つて帰ってしまうのである。夜半になつてやつて来たのは女の母で、「私」を秘かに案内することになる。女の母には以前会つたことがあり、その時は、「五」にあるように、近松の『心中天の網島』の「私ひとりの頼みの母さん、南辺に賃仕事して裏屋住み」の一節のように、「祇園町の方ほとりの露地裏に侘しひ住ひをしてゐた」というのだから、この夜もそこなのかも想像出来るようが、「私」はまるで初めての場所に行くような感じで、母に連れられて行くのである。

読者も一緒について行つてしまふような、サスペンスに満ちた、周知の一節を改めて見てみよう。

月の下の夜道をそんなことを語り合ひながら私達はもう電車の音も途絶えた東山道を下へしもへと歩いていつた。そして暫く行つてから母親は、とある横町を建仁寺の裏門の方へ折れ曲りながら、

「こつちやへおいでやす。」といつて、少しゆくと、薄暗いむさくるしい露地の中へから／＼足音をさせて入つていつた。私はその後から黙つて蹤いてゆくと、すぐ露地の突当りの門をそつと扉を押開いて先きに入り、

「どうぞお入りやして。」といつて、私のつゞいて入つたあとを門を差してかた／＼締めて置いて、又先に立つて入口の潜戸をがらりと開けて入つた。

（五）
その先に茶の間があり、そこにいた老婦人に挨拶しつづつ襖の先

の階段を上り、二階の「六畳の汚れた座敷」を通つて、初めて女のいる「八畳」に到着するのである。「私」は、いったい何回曲がつて、目的地に辿りついたのであろう。祇園の裏通りの、そのまた奥の家の、入口から最も遠い、最も奥の一間、という極限の設定なのである。

こうした設定の意味については、紅野謙介「『黒髪』論序説―〈潜戸〉の世界―」（『近松秋江研究』、一九八〇・八・二〇、学習研究社）、『解説・回想の至聖所』^{サシテミヤリ}（『近松秋江全集』第四巻、一九九二・一二・二三、八木書店）の二論文が、丹念に分析している。前者では、「黒髪」は京都から離れ、東京に戻つた時点で書かれたが故に、「作品の「一つ一つの細部にこそ〈私〉の認識する実在の京都がある」とし、作中の門も潜戸も、「私」が女の住まう〈聖なる空間〉へ入り込んでいくための入口にほかならない」とした点、後者では、この母との道行の場面が「私」にとつての永遠の現在（傍点原文）となるのは、「時間的な先後関係に拘束された物語内容よりも、先験的な時間を越えたところで物語言説の歩行が、ためらいがちの徐々にその歩行の速度をはやめ、記憶のなかの至聖所を開いていく」からだとしたところなど、見事な指摘となっている。

祇園裏が一種の「神話空間」であることは周知の事実だが、「露地」（秋江は雑誌初出では「露地」、初版では「路次」の表記を用いている）がそれを支えていることもよく知られていよう。最近も、例えば、路地が、「景色の多彩さ・シックエンスの豊かさ、そしてヒューマンスケール性などを作り出している」とする田端修「京・大阪の都心路地空間―人工の都市から自然の都市へ―」（上田篤、田端

修編『路地研究—もうひとつの都市の広場』(二〇一三・二・二〇)、鹿島出版会)といった達成も見られる。秋江作品では、路地に入り、路地を曲がるたびに世界が変化する情景が、見事に造形されている。「私」の心情にあった「悩ましさ」が、次第に薄れて行くのである。女と一緒に居られるということによって、時間と空間はその路地の奥に焦点化される。「私」は、その世界の主になるのである。

2 探索行の始まり

「路地」の奥が造型される『黒髪』に対し、連作の次の『狂乱』は、思い出の同棲の時期が過去の出来事になったその年の十一月に、旅先から京都に戻って、女に会おうとしても会えず、母親も居所を知らせようとしないので、次第に女が姿を隠したことがわかって行く物語と変わって行く。「四」にあるように、今回は、「上京^{かみ}の方、気の張らない、以前から馴染のある家」に泊まり、「ヒボコンデリーのやうに常に気の鬱いである自分の症状」を見つめつつ、「どうすることも出来ないやうな漂泊の悲哀と寂寞とに包まれながら」、じっと時を過^すすのである。

ここで読み過^すしてならないのは、この時期に、隠れてしまった女が、「叔父は油の小路とかで悉皆屋とか糊屋とかをしてある」と話をしていたのを思い出し、「私」が「油の小路に往つて、悉皆屋と糊屋とを一軒々々探ねて歩いてみよう」としていることである。「私」は実際にそうして、何の手掛かりも得られずに宿に帰るだけのだが、秋江の読者なら、そこに彼の独特な探索癖の

現われを感じるに違いない。

その後、「私」は、女の母が、前に住んでいたところの近くの一軒家を借りたことを突き止める。それも、路地の奥のわりにくいところである。

私は、心に勇みがついて、その足で直ぐ金比毘羅様の境内を北から南に突き抜けて、絵馬堂に沿ふたその横町を、少し往つて更に石畳みにした小綺麗な露地の中に入つて行つて見ると、俵屋の女房は小さい家だと教へたが、三四軒並んだ二階建の家のほかには、なるほど三軒つゞきの、小さい平屋があるけれど、入口の名札に藤村といふ女の姓も名も出てゐない。(一六)

その後、「母親と一緒に来た小村といふ男」から、女が静養しているという場所を聞き、その山科の場所に行つてみようとするのである。京都の町から、その外に行動半径が広がって行くのである。

小村は、君が独りで往つたのではとても分らない、ひどく分りにくい処だといつてゐたが、それでも強ゐて此方が訊くので、山科は字小山といふ処で、大津ゆきの電車の毘沙門前といふ停留所で降りて五六町いつた百姓家だといふ。姓はとさくと、さあ姓は、自分も一度母親に連れられて一度行つたきりでつい気が付かなかつたが、やつぱり藤村といつたかも知れぬといふ。(一八)

早速「私」は、「いづう」の寿司を持って電車に乗り、毘沙門前の駅で降り、村の人に尋ねるが、「小山はこ、から五六町やき、

まへんなあ」と言われてしまう。「逢坂山の峰つゞきにあたる高い山の麓の方に冬の日を浴びて人家の散らばってゐる村里」を見つけるが、もとより尋ね当てることなど出来ない。むなし探索行の描写は、必ず読者にそのようなことなど不可能だと思わせるような天気と状況を示す。この場合は、こんな調子だ。

為方がないから、私はそこから大津往来街道の往来の方に
出て、京都から携へて来た寿しの折詰と水菓子みづこの籠かごとを持ち
扱ひながら、雲を捉むやうなことを云つては、折々立ち止ま
つて、そこらの人間に心当りをいつて問ひく、元氣を出して
向うの山裾の小山の字まで探ねて往つた。十二月の初旬の頃
でところ／＼薄陽の射してゐる陰気な空から、ちらり／＼
雪花ゆきが落ちて来た。

(同)

この時の「私」は、もつと後で、これより何倍も厳しい探索行
をすることになるなどは、全く考えてもいなかったらう。これ
はあくまでも、類まれな近松秋江の探索行の始まりに過ぎなかつ
たのだ。「私」は、『黒髪』連作では、一所にじつと待ち続けるか、
やみくもに行動してしまふかの間で、引き裂かれた存在になつて
いるのである。

3 「自然」を背景とした演出

ここに興味深い一文がある。山科の字小山に女を探しに行つた
少し後の時点で、秋江は、「一日一信」(一九一八・二二・二四「説
売新聞」という短信を寄せているのである。十二月十九日付で書
かれたこの文章には、「此方にゐると読書の暇々にまだ見ぬ寺院

や旧跡を一人見て歩くのが最もよく寂寞を医する」とあり、次の
ように記されている。

余り関西に遊んでゐても何もしないやうに思はれますか
ら一寸私の取り掛つてゐる仕事を申せば、随分長いことです
が新潮社から出版すべき私の近松情話、早稲田大学から出版
すべきトルストイの生ひ立ちの記の改訂、天祐社から明春出
版すべき「近畿の山水」以上悉く私に興味ある仕事ですがこ
の「近畿の山水美」は取り分け私に感興があります。私は
自然しぜんほど心を安静にしてくれる物はありません。言葉は確に
記憶してゐないがゲーテが「ウエルテルの悲み」で自然のこ
とを云つてゐたのが最もよく私の意に適います。それゆゑ都
会の真中で騒然たる芝居など。とても観る気になれない。近
畿の山水を私は西洋画家や、日本画家南画派などの観るやう
な種々の心持ちや、で観たいと思つてゐます。つまり私の日
本風景論の一部なのです。そして其の仕事は私にとりて神経
衰弱治療法の一つなのです。併し小説創作の方のことも忘れ
は致しません。

事実を確かめて置こう。一九一九年には、このように多くの單
行本の出版予定があつたが、実際に刊行されたのは、短篇集『秘
密』(一九一九・八・一〇、天祐社)一冊のみであり、恐らく紀行文
集が短篇集に変えられたのであらう。新潮社からの「私の近松情
話」は、少し前に『新註近松名作集』(一七二七・二〇・八)を編
集しており、「私の」とは当面の女との経緯を、何らかの創作世
界にまとめたという意向であつたのではないか。山科の探索行

が終わったばかりで、ある程度の目途があったのかも知れない。早稲田大学出版部からのトルストイ『生ひ立ちの記』改訂は、その後も実現していない。

わたくしが確かめたかったのは、女が姿をくまますという異常な事態であっても、秋江の作家としての意識は動揺してはいなかったのではないかと、ということである。逆に、自分自身の立ち位置を、明確に認識していた感じすらある。その意味で、秋江が「自然」を問題にし、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』の描写を想起しているのは、興味深い。「心を安静にしてくれる」ものとしての「自然」というのは、ゲーテの作品では、次のようなところだろうか。

自然のみが無限に豊かである。自然のみが大芸術をつくりうる。
(第一巻、五月二十六日、竹山道雄訳、以下同)

私は今日或る一つの情景に接したが、それをそのまま写しとれば、世にもうつくしい牧歌となるにちがいない。とはいえ、文学、情景、牧歌、こうしたことになんの意味があるろう？ われわれはなにより自然の発露に沈潜すべきであって、技巧のごときは末ではないか？
(五月三十日)

忘れてはならないのは、そうした「自然」との関わりは、一人の人間の中だけで成り立つものであり、そこに何らの他者の存在は必要ないのである。秋江が、「山水」「寺院や旧跡」を見つめ、感興を得るのも、そうした関係性においてである。『黒髪』の「四」にも、「晩春の大和路」を訪れた「私」が、「恰どウェルテルが悲しく傷んだ心を美しい自然の懷に抱かれて慰めようとしたのと同

じやうなものであつた」という一節が見られる。しかし、ロッテの登場の後には、その「自然」すらも、ウェルテルの中では変容するのだ。

生ける自然に対する熱い情感はわが胸にあふれて、私は多くの歓喜の浴みした。これによって四圍の世界はわがための天国と化した。それなのに、これがいまは堪えがたい迫害者、呵責する靈となつて、どこにいても私を追いくるしめる。

(八月十八日)

「自然」をめぐる、このアンビバレンスな心情は決して珍しいものではないが、この一節を書き写しながら、この心的構造は、正に秋江によくあてはまるものではないかと思わずにはいられない。秋江の場合、「自然」の重みは作品の自然描写に解消され、作者の創作意識の中でバランスがとれるのではないか。「神経衰弱治療法」という自然の慰藉と、「小説創作」という人間の情念へののめり込みとは、秋江の中で、他者の存在しない、あくまでも一人の情感の中で共存していたのである。存在するのは、その二つを両極とする情感の揺れの大きさ、その情感のレベルをいかに高めるかという、創作の場での無意識の機微なのである。

4 十二月二十九日の南山城探索行

一九一八年暮のドラマを描くのが、『狂乱』の「八」である。十二月上旬の山科探索行の後、「私」の心情は、どう揺れ動いていたのか。『狂乱』の「私」は、女の母親に再び会ってもその悪態に驚くだけであり、女の母親は話をあいまいにし、女の居所を

隠すばかりである。実際のその頃が、秋江の「一日一信」のようだが、とは思えない作品の展開である。「私」は、思いを募らせ、次のような苦しい論理で、新たな探索行を試みるようになるのだ。

たしかに南山城に行つてゐるとも思へないが、母親が、毎時よくいふとほりだとすれば、或はさうかも知れぬ。あの女が、自分の索り求めえられる世界から外へ身を隠した、もう、とても何うしても会ふことも見ることも出来ぬと思へば、自分は生きてゐる心地はせぬ。そんな思ひをして毎日じつとして鬱いばかりあるよりは、当てのないことでも、往つて探してみる方がいくらか気を慰めると思つて、私は、十二月のもう二十九日といふ日に、わざ／＼そちらの方へ出掛けていつた。

(八)

「私」は、以前、女の親戚に、「南山城の大河原字童仙坊といふ処の藤村利平といふ人間」がいたことを聞いており、その南山城を探れば、手掛かりがあると思つたのである。「黒髪」連作の読者は、一九一八年十二月二十九日に、実際に秋江にそうした体験があつたのかどうかの有無を、想像してはならないだろう。あくまでそれは、作品の中の行動なのである。「私」と同じように、京都から奈良線で木津に向かい、木津で関西線に乗り換えて、加茂、笠置、大河原と乗つて行かなければならないのである。

ここで興味深いのは、木津から三つ目の大河原駅までの間の描写に、すでに確認した、自然の慰藉と情念へのめり込みの構図が、さり気なく書き込まれていることであろう。「木津川の溪谷に沿」つての「汽車からの眺望」の中で、「私」は、「堪えがたい

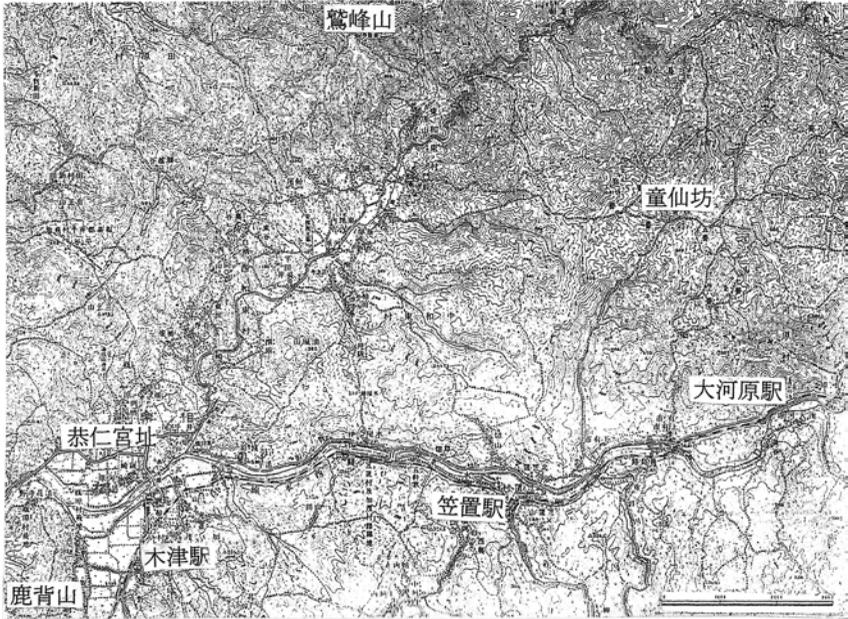
憂ひ」を感じて行く。女のものつれが、この探索行を生み出し、情念の世界が深まる。一方で、「せめても自分の好める窓外の景色に眼を慰め」たりもするのである。作者の筆はここで大きく自然の慰藉の方向にむけられ、次のような見事な自然描写、意図的に期待の心情を膨らませる演出がなされたような一節が続く。三年前の情景がこのようであつたかは、問わないようにしよう。女を探し、言わば京都から距離的に最も離れた場所に向かうシーンを印象付けるための、巧みな演出に違いない。

車室がスチームに暖められてゐるせいか、冬枯れた窓外の山も野も見ると暖かさうな静かな冬の陽に浴して、溪流に臨んだ雑木林の山には茜色の日影が澱んで、美しく澄んだ空の表にその山の姿が、はつきり浮いてゐる。間もなく志す大河原駅に来て私は下車した。

(同)

木津川をはるか下に見下ろす斜面にある大河原の駅は、今でも小さく、町の中心の役場や文化会館までは少し歩かなければならないので、けつこう寂れた感じだ。下り立つた「私」の表情が思ひ浮かぶ。この時は、「いづう」の寿司など用意する気になれないだろう。

大河原(南山城村)での探索行は、まず村役場に行つて「藤村利平」なる名前を告げ、戸籍簿を調べてもらふことから始まる。当時に近い地図を確認しながら、描かれた空間を確かめてみたい。別れた妻が日光に来たことを、日光の宿屋の宿帳をしらみつぶしに調べて突き止めるという、あの執念に近い行動である。が、戸籍簿でも見つからないし、「童仙坊」という場所(4)もつと山の



中であり、「こ、から車馬も通はぬ険悪な山路を二三里も奥へ入つて行かねばならぬ」場所だという。ここで注意しなければならぬのは、「二三里も奥へ」とあるものの、実際は一里少しの距離であり、いかにも遠い奥の地という印象を分け与えられていることである。秋江の記憶違いと、単純に考えてはならないだろう。作者の作品造形上の計算があるはずである。また、大河原駅の木津川対岸には、「恋路橋」を渡つて、「恋志谷神社」があり、秋江も眼を止めることが出来たように思う。印象的な名の神社だが、秋江は、その作品に吸収出来そうな恰好な素材を一切無視し、奥深い「童仙坊」のイメージのみに、賭けているのである。

「私」は役場の人間から、「藤村」の姓なら、隣村に当たる、「鷲峰山といふ高い山の麓」の村（現在の和東町）に多いという情報を知る。そこで、加茂の駅まで戻り、それから北方の鷲峰山の麓の村に向かって、「五六里の道」を入れて行くこととするのである。わたくしは、ほんとうのその姓が、その地方に多いのかは、知らない。ただわかるのは、今でもバスの便が悪いその麓の村、和東川に沿った「原山」あたりまでは、「五六里」ではなく、二里あまりであるという事実なのである。ここでも秋江は、距離をかなり長く書いている。それだけ、目的地、女の手がかりがわかるかもしれない、もしかして女が潜んでいるかもしれないその場所を、遠くに遠くに描こうとしているのではないか。遠くにあればある程、その場所は、「私」にとつて手を差し伸べたい場所、憧憬の場所として意識される。その極北が、次のような描写である。

南山城の相楽郡といへば殆ど山ばかりの村である。そこに

峙つてゐる鷲峰山は高標はやうやく三千尺に過ぎないが、巉岩絶壁を以て削り立つてゐるので、昔、行の小角が開創したといはれてゐる近畿の霊場の一つである。その麓を繞つて、殆ど外界と交通を絶つたやうな別天地が開けてゐるのである

(同、傍点中島)

実は、土地の人々が「じゅぶせん」と呼んでいる鷲峰山の実際の高さは、標高六八二メートルなのである。作中では、かなり高く描かれているわけだ。それもとても険しうなのである。事実、今胎寺のある山頂付近は険しいのだが、秋江が登つたという話は無い。この書き方からもわかるように、あくまで、何らかの資料を見たのか、また聞きなのである。そして、「別天地」の一語が強く響く。女のいるところこそ、この「別天地」なのである。さしずめ、女は、「別天地」の精霊とならうか。

加茂駅に戻つた「私」は人力車を雇おうとするが、「とつても……」と言つて断られる。「狂乱」の幕切れは、その後数ページの、感極まつた心情を描く部分である。

私は、思案に暮れて暫くそこに突立つて考へてゐたがさうかといつて、断念する気にはならぬので、必ず行くと云ふ決心はなかつたが為方なく駅路の、長い街つゞきを向うへくと何処までも歩いて行つた。やがて半道も行くと、街道はひとりで高い木津川の堤に上がつていつた。木津川も先きの大河原駅あたりから、こゝまで下つて来ると、旺洋とした趣を備へて、川幅が広くなつてゐる。鷲峰山下の村に通ふ街道は、そこに架した長い板橋を彼方に渡つてゆくのである。私

は、ゆかうかゆくまいかと思ふよりも行けるか、どうか、を氣づかひながら、ともかくその長い板橋を向うに渡つていつた。それでも、なか／＼交通が頻繁だと思はれて、相応に人が往来してゐる。私は長い橋の中ほどに佇んで川の主流の方を眺めると、かなり険阻な峰と峰とが襟を重ねたやうに重畳してゐる。時によつては好い景色とも見られるであらうが、午后から何だか、寒さが増して陰気な空模様に変つたと思つてゐたら、雪花がちらりちらり散つてきた。(同)

この印象的な描写の中でも、わたくしは、「重畳」の二文字の効果に注目したい。この言葉が「黒髪」連作の中で使われているのはただ二回で、この部分と後述する幕切れ近くのみなのである。

「かなり険阻な峰と峰とが襟を重ねたやうに重畳してゐる」という表現で、読者はどういふ景色を想像するのだろうか。実際に、恭仁大橋に立つて上流の方角を見てみると、「険阻」とはほど遠い、なだらかな山容が見渡せるのみである(写真参



照。「私」の心理の緊張、困難さの増幅を示す、巧みな行文なのである。

「かなり險阻な峰と峰とが襟を重ねたやうに重畳してゐる」という表現は、すぐ後で、「深い山又山が重畳してゐる」というふうに変奏されて登場する。もう一つの、「重畳」の語の使用例である。「行く手」とあるから、必ずしも「川の上流の方」(東方)ではなく、女がいるかもしれない鷲峰山の麓の方角(北方あるいは北北東)となるうが、かえて「氣勢」とあるので、正に心理的な重圧感、自分の行く手を塞ぐ重いものの意識、といった色彩も出て来よう。

私は、心に、若い馬子の深切を謝したものの、さすがにその荷車に乗り兼ねた。自分は、何の因果であの女が諦められぬのであらう。と感慨に迫りながら行く手の方を見ると、灰色空の下に深い山又山が重畳してゐる氣勢である。

「いや、もう、止さうか。」と、若い馬子にいつて、私は到頭断念して引返した。そして又木津川の長い板橋を渡つてくると、雪を含んだ冷たい川風が頬を斬るやうに水の面から吹いて来た。

(同)

この数行が、『狂乱』の最後の一節だが、この部分の表現については、大岡昇平『近松秋江『黒髪』(一九四八・三・一〇)批評』の見事な分析が知られている。印象批評だが、戦後間も無くの新しい文学表現を作りつつあった、場所の表現に巧みな大岡昇平が、こうした手放しとも言える絶賛を送っているのが注目される。

その叙述には一種叙事詩的なテンポがあり、屢々男らしい

簡潔な単純さに達しているのである。『黒髪』もこの辺りが一篇中最も精彩に富む所であつて、わずかに数頁の描写ながら、何の変哲もない山の中の冬景色と、煩惱を下げてその中に行く「私」の姿が生々と描き出されている。(中略) 行きの馬子の姿もかちりと描かれているし、女は実はその山の奥にはいないのであるが、あそこにいるかも知れないと心を残して顧みる秋江の感慨は「山又山が重畳している氣勢である」の一句にあふれている。人はめつたにこの種の効果に達するものではない。

もちろん、少しも訂正するところは無い。ただ、「何の変哲もない山の中の冬景色」といつても、そこに誇張は抑えられてはいるが、巧みに計算された表現が存在していたことは、忘れてはならないだろう。

ここで、『狂乱』の「改造」初出では、実は作品はここで終わっていないかつた事実を眼を注ごう。「八」に引き続き、「九」「十」の二章が続いて書かれていたのである。引き続き翌月の別の雑誌に発表された『霜凍る宵』は「一」から始まるが、「十」に引き続きいた場面から開始する。単行本『黒髪』では、『黒髪』『狂乱』『霜凍る宵』の題名をやめ、『黒髪』全二十三章とされた。『狂乱』の「八」は、単行本では「十四」であり、あくまでも作品の途中に位置している。円本時代の『現代日本文学全集32 近松秋江・久米正雄集』(一九二八・四・一、改造社)や『明治大正文学全集42 近松秋江・宇野浩二』(一九二九・一〇・二五 春陽堂)では、初版の全二十三章の本文が収録された。再び『黒髪』『狂乱』『霜凍る

宵』の三作連作という形に戻されたのは、秋江生前の『近松秋江傑作選集』第一巻（一九三九・八・一、中央公論社）からである。その折に、『狂乱』は全八章、『狂乱』の「九」「十」を『霜凍る宵』の「一」「二」とし、初出の「一」が「三」とずらされたのである。こうした処理が、秋江の意向かどうかはわからないが、南山城探索行を『狂乱』の最後に置くという処理は、なかなか巧みで、結果的に成功しているよう。戦後のよく読まれた流布本である創元選書『黒髪』（一九四七・七・三〇、創元社）もその体裁を踏襲し、以降その構成が各種文学全集に採用され、現在まで来ている。

もう一点指摘しなければならないのは、秋江が同じ素材を、今度は「私」という一人称ではなく、客観的に書いた作品『旧恋』（一九三三・三・一、四・一、六・一「新小説」）が存在し、そこではこの南山城探索が、かなり変形して書かれていることである。既出の紅野論文でも論じられているが、『旧恋』の描き方は、執筆時期が遅く、かつ客観的であることもあり、女の出自についてかなり詳しい説明がある。紅野氏の言う、『旧恋』の方が信憑性は高い。『黒髪』では女は鷲峰山中の村落に生れたらしいという曖昧さは残るものの、作者がそれ以前の女の出自を隠蔽したことは疑いえない」というのは、恐らく確かであろう。そのかわりに、『旧恋』は、同じ時期のことを別な角度から書いているが、大河原での探索は簡単に記されているものの、加茂の駅に降り立つてからの部分は、まったく省略されているのである。言わば、『狂乱』の幕切れの部分は、秋江の創作の過程で、ただ一回造型された、孤高の一節なのである。「路地」と「別天地」の両極に渡された

創作世界の張りつめた緊張から生まれた、ただ一回しか書けない表現だったのである。

5 もう一人の南山城探索者

近松秋江が一九一八年年末、加茂の町を彷徨してから二十三年後、一九四一年（昭和一六）十二月に、そのようなことがあったことも知らずに、同じ場所を訪れた文学者がいる。『大和路・信濃路』連作の一章『十月』（一九四三・一・一、二・一「婦人公論」）の背景となった一九四一年十月の奈良地方での長期滞在の後、堀辰雄はその年の十二月に数日の再訪を実現するが、その間十二月二日にまる一日、『万葉集』の背景の一つである瓶原を訪れている。瓶原は、七四〇年（天平二二）から二年程、聖武天皇の恭仁宮みやがあった所である。『大和路・信濃路』の一章『古墳』（同三・二）の次の一節は、その一日のことを書き記したものである。

次ぎの日——きのふは、恭仁宮の址をたづねて、瓶原にいつて一日ちゆうぶらぶらしてゐました。ここの山々もおほく南を向き、その上のはうが蜜柑畑になつてゐるものと見え、静かな林のなかなどを、しばらく誰にも逢はずに山のはうに歩いてゐると、突然、上のはうから蜜柑をいつぱい詰めた大きな籠を背負つた娘たちがきやつきやつといひながら下りてくるのに驚かされました。ながいこと山国の寒く痩せさらばうたやうな冬にばかりなじんできたせゐか、どうしても僕には此処はもう南国に近いやうに思はれてなりませんでした。だが、また山の林の中にひとりきりにされて、急にち

かぢかと思えた。鹿背山などに向つてみると、やはり山への冬らしい気もちにもなりました。……

『古墳』は、その翌日飛鳥の村を訪れた時に見た菖蒲池古墳の強い印象の部分が中心になっており、瓶原についての記述はわずかである。この頃、堀辰雄は、『万葉集』の世界を背景とした創作を考えており、ゆかりの場所を訪問しながら、創作の雰囲気を感じ立てていた。その意図は、ノートにとどまり、最終的に実現しなかったが、かえつてそうした何気ない訪問を、自身喜んでいたかのである。

恭仁宮跡（山城国分寺址）を訪ねるには、加茂の駅から行かなければならない。そして、恭仁大橋を必ず渡るわけだ。秋江は、橋の上に立ち、鷲峰山のある北方向、あるいは木津川の上流の東方向を望む。が、恭仁宮跡を訪ねる堀辰雄は、橋を渡ってから北西方向に歩いて行くことになる。「山のはうに歩いて」というのだから、遙かな遠くの鷲峰山ではなく（橋からは、鷲峰山の頂上は見えない）、北西になだらかに広がる近くの山に向かい、その近辺の散策を試みるのである。蜜柑狩りの娘たちに逢つたのも、その近辺であろう。木津川の北側に沿つて少し下れば、南の対岸に見えるのが鹿背山である。

この時期の堀辰雄の奈良・大和散歩には、何冊かの参考書があった。堀辰雄が見ていたのはつきりするものの中でも、わたしは次の二冊は、堀の散策の友としてかなり活用されたものと推定している。

辰巳利文『大和雜記』（一九三〇・六・二〇、紅玉堂書店）

北尾鐮之助『聖蹟大和』（一九四〇・二・一五、創元社）

前者には、「鹿背山と和豆香山」「泉河と恭仁の宮」の二章があり、『万葉集』の歌の引用も多く、恭仁宮の概略が知られる。木津川北の一角が、むかしの瓶原であることが判明したのも、秋江がこの近辺を訪れた時期よりも後であったという。堀辰雄は、十二月二日の散策の折は、恐らく後者を持参したのである。すでに報告したように、自分の堀辰雄文学記念館所蔵の、堀辰雄が架蔵していた『聖蹟大和』の見返しには、鉛筆書きの「加茂に本^本と」と、汽車の時刻をメモしたと思われる書き込みがあるからである。『聖蹟大和』の「瓶原と泉川」の章は全十三ページ、巧みな文章で、これを読めばやはり行つてみたくなる、といった感すらある。一節を引こう。

こ、（*恭仁宮の址の北方の山腹にある海住山寺）からみる瓶原一帯の景色は、可なり立派である。前に横はつた鹿背山の翠緑、加茂村一帯の美しい丘陵。その間に遠く入り込んでゐる扇状地の段々畑。その中を走つてゐる白い街道。道がゆるゆると廻つて、漸く尽きる辺から、地盤がだんだんと高くなつて行き、奈良あたりではさほどに思はれぬ御蓋山が、こ、からみると、いかにも主峰らしい貫目をみせて屏風の如く聳えてゐるのに驚かされる。却下を流る、悠々たる木津の流れ。その屈曲をめぐつて行く白帆の二三。

少し先には、「この辺から、みる夕陽の大景は、全く一幅の絵巻である」といった思い入れの強い一節すらある。これを読んで、さすがの堀辰雄も、新たに何か書いてみようとは思わなかつ

たろう。北尾録之助の文章を引いたのも、その横に近松秋江の『狂乱』の幕切れの文章を置いて、その言葉の重い、しかし強く印象に残るトーンを、改めて振り返ってみたかったからである。

「美しい」「ゆるゆる」「悠々たる」と繰り返されるトーンは、そのまま堀辰雄の体験で増幅され、それは健康そうな「娘たち」の姿と重なる。堀辰雄がその日に感じた、「南国に近いやうに思はれて」という印象は、正に秋江が描く「私」に降り注ぐ雪や、寒さによるこわばりの感覚と正反対の世界であろう。それだけ、秋江の作品の一節が、類いまれな表現となっているのである。秋江の世界は、事件が異常なものではない。知らず識らず言葉の世界に重さを与えることになった、秋江の創作意識や作品の見事な空間構成こそ、眼を向けなければならないのではないか。

注(1) 東三本木丸太町上ルにあった、文士がよく利用した旅館「信楽」。

この有名な宿については、拙稿「京都の遠景、京都の点景——『五足の靴』・志賀・子規・吉井勇に見る風景表象——」(二〇一・二・六・一五「国文学研究」第一六七集)で触れたことがある。

(2) 秋江は新しい女を知ってから、以前の女との経緯を作品に造形する、という平野謙の名言があることを思い出そう。秋江は、一九二一年(大正一〇)五月からマツサージ師猪瀬イチと知り合い、翌年結婚し、後に二人の娘を得ている。

(3) 陸地測量部の五万分の一地形図「奈良」(一九一六・一二・二八発行)を四〇%に縮小した。

(4) 童仙坊は、今でこそ宇治茶の産地であり、夏の避暑地として親しまれているが、むかしは開拓地であり、京都の町の下層民の入植地であったという。既出の紅野謙介氏の論文に、明治初期の童仙坊開

拓事業から、この地に、「都市被差別民の歴史」を嗅ぎ取ろうとする問題提起がなされている。

(5) 後醍醐天皇を慕うある高位の女官が天皇の身を案じ遠く伊勢から駆けつけたが、天皇はすでに追手から逃れた後で、女官は自害してしまう。その霊を慰めるための神社で、正しくは「こいしだに」だが、地域の人は、「こいしや」と呼んだりしている。橋は戦後に架けられ、むかしは渡し船があった。

(6) 竹盛天雄「黒髪」全二十三章という読み方(一九六九・五「名著復刻全集近代文学館ニュース」一六、後「介山・直哉・龍之介——一九一〇年代 孤心と交響」(一九八八・七・一〇、明治書院)所収)は、この全二十三章という体裁を重視した問題提起である。

(7) 堀辰雄の『古墳』については、拙稿「『古墳』にみる堀辰雄の創作意識——『大和路・信濃路』に揺曳する『受胎告知』の世界——」(二〇一三・九・二五「文学」一四卷五号)で考えた。

(8) 「朝日新聞」(二〇一四・五・一三朝刊)の「京ものがたり——白洲正子と木津川の十一面観音」に、海住山寺の上空から南西方向を撮影したカラー写真が載っている。秋江が望んだ北の方角でなく、平野が広がる反対の方角の様子がよくうかがえる。

*『黒髪』連作の本文は、原則として、八木書店版『近松秋江全集』所収の初出の本文を用いた。